



沖縄国際大学

教授 富川 盛武

明の時代から中国との交流があつた琉球は、その後朝鮮半島を含む中國大陸・日本・東南アジアを結んだ「三角貿易」を推進することにより富を湛え洗練された独特的の「琉球の時代」を築いた。その背景には幕府の鎮國・明王朝の海禁政策が背景にあつた訳であるが、島嶼経済である沖縄は「市場」と「市場」の結節点として機能していた。既にその頃から現代でいう海外ネットワークを構築していただけあるしかし沖縄は元々市場の狭小性・資源の狭隘性等の特質を持つ小さな島であり、市場経済成立後はアジアの舞台から消えた。戦後は基地依存、復帰後は財政依存により一定の発展を遂げたものの「成長のハジキ」は未だ内蔵されていない。

眼前で補完しある成長を続けている中國大陸・南海岸部・香港・台湾を含んだ華南経済圏と、この壮大なダイナミズムがついめてここへ。これらに大きな分水嶺となる。今沖縄では上海ー那覇間の空路・海路の開設、特別FTZの新設、台湾資本の沖縄投資等、台湾・沖縄・中国を結ぶいわば「蓬萊経済圏」と呼べる経済圏成立に繋がる胎動が見られる。沖縄とアジアの経済的連結が叫ばれてから久しいが、未だそれが結実しているとは言いかた。規模の経済圏成立に對比させ、その経済の困難性、市場の狭小性・資源の狭隘性等、島嶼経済の経営により、沖縄とアジアの国と対比させ、その依存・補完関係を見出すのは困難な状況にある。かつての琉球の時代の三角貿易の教訓を示すように、市場と市場の結節点という視点からアプローチが現実的かつ有効であるようと思える。

#### 一 中国大陸と台湾の中継地

台湾と中国大陸には既に台湾の資本、技術と大陸の低賃金及び市場との補完関係を基礎にした経済

に沖縄が参画できるかどうかは沖縄にとって大きな分水嶺となる。今沖

連続が政治的対立を越え成立している。しかし「三不政策」の下、直接通行・通商ができるなどといつぱり

の連続は可能性が高い。

#### 三 特別FTZへの立地

税制面での特別な配慮がなされたとはいへ、アジア各国に比較する

たとは、アラビア、日本と台湾の高技術のキーポート、大

陸の低付加価値部品の補完、加工を梃子にした情報通信関係の加工拠点等は検討に値しよう。

蓬萊経済圏の萌芽は沖縄経済に

ついて望ましい兆候であるが、生き馬の目を抜く中国の商法に呑み込まれない、客観的にアジアの動向を察知し対応できる国際的センスの涵養も急がれる。

#### 二 アジアの観光地

アジアのダイナミズムに伴つて多くの観光需要が派生し、アジア内の観光サーキットも増加している。台湾をはじめアジアの国には高所得者が存在する。ある余合で、台湾の客が沖縄で家族で高級ホテル・クルーズ付きで一週間過ごせるならば百万日本円を出してても良いこと、話があつたが、残念ながら沖縄の観光業者はそのようなメドレーを持ち合わせていなかつた。今後、高付加価値のメドレーを開発してアジアへの多極依存に転換する事が課題なうて、台湾復興航空の台北ー石垣間の航空便開設の取り組みや復華の那覇新都心へのホテル建設も予定されて、比較優位を持つ沖縄の観光産業と

